

佐藤典司 優秀審査員賞

(福島県西白河郡)

後藤 さとみ

月の沙漠

死んだ父は「月の沙漠」という歌が好きでした。残念なことに尋ねたことはなかったので、今となってはその理由は分かりません。

小学生の頃、日曜の朝になると決まって父は、私の部屋の真下にあるオルガンで、この曲をぶかぶかと弾くのでした。私はへたくそな間奏の辺りで、仕方なく起き出してきたものです。ぐしゃぐしゃの頭、半開きの目玉でそばに行くと、「この歌、いいべえ」と、いつも同じことを父は言いました。

私は「うん」と生返事をしながら、ぼーっとしている頭の中に、白い服を着た王子様とお姫様が月明かりの中、果てしなく続く砂漠の丘を上ってゆく様子を思い浮かべて、「これは朝らしくない歌だけれど、このさびしい感じは何か日曜日に合っているのかもしれない」と思ったりしたのでした。

父が末期がんと診断され、緩和治療のために使っていた薬のせいで朦朧としていた時、私は病室で小さな声でこの歌を口ずさみました。「つきのくさばくをくはるるばるとく」のところまで来たときに、父も唇を動かして歌にはならない歌をうたいました。なつかしくてかなしい歌でした。

告別式では兄弟四人で相談してこの曲を流すことにしました。春にしては空が真つ青に澄んでいる美しい日でした。たしか、陽光桜という早咲きの桜もほころび始めていました。

父はひとりで、どこまで行ったのでしょうか。黙ってとぼとぼと、らくだに揺られてどこに行ったのでしょうか。お姫様がいつしよでなくて、きつとさびしい旅かもしれません。

階下より父のオルガン。ぶかぶかと鳴りて目覚める日曜の朝

病床に意識混濁せる父と月の沙漠をいつしよに歌う

